第39号（2001年9月～2002年3月）

－農場便り－

タイ・パヤオ２１世紀農場
谷口巳三郎

農場で実施した主な行事（日程順）

9月

○9月26日～11月25日（2ケ月間）、隣りの県のチェンマイ農業高等学校の3年次の男3名・女4名が2ケ月間の農場研修に。北部タイにあるタイの農業高校が何故NGOの我々の農場にやってくるのか？タイのフォーマル（文部省による正式の）の農業高校教育に何か欠陥があり、我々はそれを補完しているという事なのか。但し、このことは日本も同種なのではなかろうか。

10月

○11日、イネの収穫にコンバインが初登場。日本では何十年も前から利用されているが、タイでは教育機関としては第一号ではないか。道行く多くの人々がもの珍しげに見学にやって来た。日本大使館の草の根無償資金援助により、クボタが日本より取り寄せたもの。

○27日、チュン郡のエイズグループ20名が農場施設利用で2泊3日、その間炊事は農場担当・農場生と何の差別もなく、席も食器も洗い場も共同使用。

○28日、日本の海外青年協力隊員の男1名・女1名が研修に来泊。日本の協力隊員は若く経験もないので現場に入って苦悩しており、毎年タイ以外の東南アジアに派遣されている隊員も数名、私の門を叩きにやってくる。

○22日～30日、タイの農業研修生6名、カニータ・赤塚（トム）の引率で熊本の農業研修へ。経費50万円は「タイとの交流の会（谷口プロジェクト）」より。日本での引き受け、案内は「北部タイ農業振興会」が担当。今回で7回目。メンバーは農校の先生1名・生徒2名・普通高校の先生（女）1名・農村青年1名の構成。

11月

○10月30日～11月17日、日本へ帰国。熊本県教育委員会より、秋の頃に平成13年度の熊本県近代文化功労者賞を授与したいという連絡があり、一時帰国する。

○10月31日～11月1日、千葉県松戸市立高校にて講演。11月2日の熊本県教育委員会よりの受賞式に出席するため帰国することを知られた、同高校の榎本先生がスケジュールを組まれたので、千葉へ。夕方19時頃より、生徒・保護者・一般の人々で約80名、同高校での講演は2回目である。ホテル宿泊。翌11月1日は、高野先生の松戸市立第三中学校の生徒120名へのレクチャー。2日間の松戸市の中・高校の受講生は態度もよく、熱心に聞いてくれて、日本の若者に希望をつなぐことが出来た。午後の便で帰熊。

○2日、熊本県近代文化功労者顕彰式へ出席。12：00～14：00、詳細は別記。夜、40度の高熱あり、翌3日病院でチェック。

○4日、「タイとの交流の会」にて講演。千葉県松戸市立高校の榎本先生・舟入君（早大大学院）も駆つけてくださる。

○7日～15日、熊本市内の病院に肺炎で入院。

○17日、12：00のフライトでバンコク→チェンライ→帰場。

○26日、日本より、大根・人参・ゴボウの種子を持参して農場で試作。その折、八代の生家より柚・橙の実を各々100余粒ずつ持参。これは将来、高地民族の換金作物として栽培させてみたいと思って、これらを農場の圃場にまく。昨年はザボンの晩白柚を5本持参し、接ぎ木で殖やしている。すべて有機農業でやるので、果たして熱帯の病害虫に耐えられるかどうか。

○27日～28日、パヤオ農業高等学校で行なわれている、北部タイ農業高等学校の農業祭に田植機及びコンバインを運搬して、展示・実演を行なう。これら二種類の日本の近代農機具は、タイにはないので大きい関心を集めた。

12月

○2日～9日、京都精華大学の女子学生・小野梢さん研修。大学は農業と全く関係がないが、農家の跡取り娘で、農業をやるといって熱心に頑ばる。農場の横の国道の我々が植えたチークの木の欠株に、20本を夕食後1人でボランティア活動により植えた。大事に育ててやりたい。

○24日、馬鈴薯を植える。農場で初の試みである。タイのあるポテト・チップスの会社が、種子薯を輸入し作らせるもので、種子は30Bt（80円）／kgで売り、できたら7Bt（20円）／kgで買上げるという。値の開きが4倍強、我々は自家用と豚の飼料にしてもいいと考え、200kgの種子を求めて、水田裏作にする。

○26日、28日、熊本の沖村好運氏の引率で、「ヤング・スタディー・ツアー」と銘打って高校生・中学生の5名来場。彼らの研修の成果や如何？後日談になるが、帰国後の

沖村氏がまとめられた文集から２～３を拾うと、

（１）「何のためのツアーか」の中で、「根無し草のように漂流している彼等に、ガチッとした心棒を入れてやりたい」というのが今回の旅の動機です…と。

（２）当初僕が予想していた以上に原稿が早く集まり、内容も個性的で面白く、とても喜ばしいことでした。感心・感動する場面もしばしばありました。「連れて行った甲斐があった。」と正直にそう思いました…と。

以上（１）（２）は引率者の沖村好運氏の文ですが、次はツアーメンバーの文集の中で最も光っている、高校２年生の小川啓満君の感想の末文です。

「この旅で僕は、抱えきれないほどの択山の大切なお土産を頭の中にインプットしました。これから僕がどう生きていくか。自分自身で本当のことを見つめて、力一杯生きていこう…、と心に誓う八日間の旅でした。」

○26日～1月4日、千葉県・松戸市立高等学校の榎本先生引率の女子高生３名、同行者・高野先生及び主婦の保科洋子さん。これらの人々は、私が11月１日にその学校に講話に行った時にも会った人々であったが、３人のうち１名は去年も来て２回目。もう１人の帰国後の礼状は「今回農場を訪問した時、私は先生がお話をされる時はずーっと目を見つめていました。そして先生の行動も見ていました。」とあった。「人の師たり、教育者たるもの、常にしっかりと大地を踏みしめて歩き、一瞬といえども心に曇りを持ってはいけないけと。」彼女は私に師を求めたであろうけれども、私は彼女に私の師を見た。

このグループとある日、村の小学校の運動会場に行った時、そこはゴミが一面に散らかっていた。私はここで沢山のゴミを拾った。それを見て、松戸高校の３人は一緒になって拾った。この行ないは大変勇気がいる行動で、普通には横で見ていても実行は出来ない。私はこの時、この３人に「あなた達は今日、自分の心のゴミを択山給いましたね。」と言って賞めた。

その翌日の夜、農場から４ｋｍ離れた村の、２年前に主人がエイズで死に、今８歳の娘を持つ極貧の農業の日雇いで生きている40歳前の婦人を訪問した。トタン葺きの屋根には20以上の穴が空き、雨の時はいっぱい漏るという。台所の床板も崩れかかった家であった。１人の生徒は、この家の訪問が今回の旅行で最も大きい衝撃を受けた。とお礼状に書いていた。この様を見た同行の主婦の保科洋子さんは５万円を出し、この家の修理とエイズの子供のオヤツ代にと私に預けられた。これも後日談になるが、その金で、屋根はスレート葺きに変え、床もしっかりしたものになり、今その主婦は、私の農場で常雇いの農業労働者として働いている。住んでいる所は自分の父母兄妹もいる村であるが、主人がエイズで死んだので、彼女もエイズの筈だといって日雇いの口がなかなか無いというのである。エイズの差別である。

1月

○２日、日本種の深ネギを10アール位定植。90㎝の畦巾に４～５㎝の株間で、約３ケ月して太さが拇指大、白根が25㎝位になってから、バンコクの日本人向けにバス便で、約７００㎞の旅で翌朝着く。今年から周年栽培・出荷を計画。しかし、値段が安く中間経費が高いので利益は僅少であるが、有機農産物ということを強調して利潤を高めたい。

○20日～25日、タイとの交流の会９名来訪・栃木県の支部より５名・熊本県より４名．バンコク空港で合流して、20日の夜７：00すぎチェンライ空港で出迎え。２日目の22日、交流の会から奨学金を受けている約６００名の中の１８０名が、農場の一角のチーク林の中に設けた会場に集合し、約１時間をかけて、日本グループとタイの生徒達との交流会。その後、里子と里親のほほえましい出逢いがあった。交流会のスケジュールは、ビルマに入国・ゴールデントライアングルを見学し、果樹の森を見学・朝市・エイズグループとの座談会等を行い、チェンマイに一泊して26日に帰国。

2月

○５日、モヤシづくり及び豆乳づくりの器具類をエイズグループへ配布。エイズグループを指導しているトム（赤塚）がグループと相談し、７つのグループに上記を援助配布した。モヤシは作って村の朝市で売り、現金収入を得ることも出来るし、また豆乳ともども新群なビタミン・蛋白を補給して、死の時を幾らか遅らせることが出来る。「病気といえば薬」ということになるが、今日エイズの元となるＨＩＶの治療薬はなく、一時的に死の時を引き延ばすことに役立つ薬はいろいろあるが、タイの政府も、アメリカの製薬会社やＷＨＯなどと手を組んで実験はしているが、貧しい人々には手が出ない位に高くつく。従って個々のエイズの人々は、栄養のあるもの・ビタミン等を採って、生命を少しでも長らえるということを試みるより他はない。モヤシでもよい、豆乳でもよい、手の届く所より試みることである。子がある親なら、自分が死ねば誰が残された子の面倒を見てくれるのかが心配。それもあるが、一刻でも長く生きたいというのが人間万人の願望であろう。

○13日、熊本・アジアパートナーシップグループ16名来訪。朝８：50チェンライ空港でマイクロバス２台を準備して出迎える。そして翌14日の早朝その空港へ送るという、私の農場への滞在は計20時間という、一日にも満たないあわただしいスケジュールであった。聞けば第３回目の今回からは、このプロジェクトの推進母体が、熊本県と熊本市からＮＧＯのコミュニティー・ネットワークへ変わったということで、学習の内容が大きく変わり、東北タイ（タイの最貧地域）における教育施設・奨学金援助が、元々このコミュニティーネットワーク協会の活動ということで、見学学習の重点がその方に置かれた様であった。今迄の２回の訪問で、エイズ問題・北部タイの高地民族の問題、つまり麻薬の取引き及び焼き畑による環境破壊及び森林乱伐による気象の大きい変動を見聞して貰っていたが、僅か20時間の北タイ滞在ではそれらが消化出来なかった。このアジアパートナーシップグループの主旨・目的を再確認し、メンバーの帰国後のその研修成果の社会への還元のあり方についても、（３回の経験を経たのであるから）初志に返って再検討すべき時に立ち至ったのではなかろうか。

○21日、熊本西南ロータリークラブより浄水施設の寄付を受ける。かねがね私のプロジェクトの強力な支援者で、熊本西南ロータリークラブのメンバーである、田上能戴氏の発意・肝入りで、農場生に安全な良い水を飲んで貰いたいということで、隣郡のチェンカムロータリークラブを動かし、ニューヨークの世界ロータリークラブの本部と話をつけて、上記の施設が約１ケ月かかって出来上がり、２月21日に現場で贈与のセレモニーを挙行。当ロータリークラブ及びチェンカムロータリークラブよりも多数参列して頂いた。炊事用の水は勿論、農場内では、寮・食堂・集会場にも常時冷水が飲めるようになった。

○22日、

（１）アカ族・ヨハン君が作った「メコン学生寮」の開所式。三階建ての堂々たる建物は大使館の草の根無償資金より。この寮は熊本県の球磨・人吉文化交流協会（会長・桑原庄之進）が主体となって奨学資金が調達されている。この日はアカ族の人々が主力。日本よりも沢山の方々が見え、総数１２００余名の出席。私もテープカットに参加した。

（２）大使館より農場を見学へ。平成13年度、大使館の「草の根無償資金」を頂いて、コンバイン・田植機・生徒寮一棟・灌漑施設等を設置したので、大使館の担当者・中村暁雄一等書記官がそれらの現状を見に来場さる。

（３）熊本県の球磨・人吉文化交流協会のメンバー６人来泊。上記（１）のヨハンの学生寮の開所式に参列のため訪タイされたもの。年輩の御婦人が主体。翌朝、隣り部落の朝市の見学に案内。日本の昔の風景であろう。

○23日、チェンライ市にある高地民族の学生等１２００名のいる小・中併設校で、中学生の卒業式にて講話。私は指を１本立てて「勉強だ」、２本立てて「勉強だ」、３本立てて「勉強」と強調し、「親が君達を他人に誇れるような生徒であらねばならない。私は私の農場の生徒へ毎朝のスローガンで『私は家族の希望の星です』と大声で言わせている。君達もその様に大声で言える生徒に育ってほしい。」と、ヨハン君の通訳で。この学校のビッチャイ校長は高地民族のカレン族出身で、私の愛弟子の一人。

３月

○16日、生徒の強歩会。…卒業前のイベントとして今年が初めての試み。朝４時起床、車でチュン病院まで運び、まだ明けやらぬ５時にボトルの小ビン１本持たせて、農場まで24㎞、中間点で朝食をとる。チュン病院のエイズ担当婦長宅の広い庭に農場から朝食を運んで、そこで休憩を兼ねて食事をとる。24㎞を約７時間かけて11時頃に帰場。この試みは強歩大会といえるものでもないし競争でもない・三々五々、グループが一団となって普通のスピードで歩き通すのである。丁度農場に研修に来合せていたチェンマイ農高生の男女７名も参加した。初めての試みで、日本ではあちこちの高校で行なわれているが、タイではほとんど聞かない。体力の限界に挑むというところまではいかないが、来年からはもっとハードなものにしてみようかとも考えた。

○23日、農場終了式。…19名終了する。例年よい生徒が巣立つが、今年は更に「良い生徒達」であったと思う。父兄・姉妹の居る前で、毎朝唱えている３つのスローガンを大声で唱えさせ、次いで「今、君の摩は輝いているか…」も同棲に唱和させる。卒業証書は、壇に１人１人上がって私がオメデトウといって手渡し、握手して「頑張れよ！」と目と目を見詰め返して手を放す。卒業記念に今年も１人１０００Ｂｔ相当のものを贈る。例えば仔豚・果樹苗…憐り県のナーンからのモン族の２人ほ共同で１台のモヤシ作り器をリクエストした。２年次を本校の寮で生活するので、そこでモヤシを作って売り、学資の足しにするのだそうだ「Ｇｏｏｄ ｉｄｅａ！ 21世紀を正しく生きよ」

○26日～28日、ビルマに「農業研修施設」を作る準備のための旅行。高地民族のラフ族の私の愛弟子のダイエー君が、同族のビルマ人達が農業の研修施設を作りたいので、一緒にビルマに行って検討してもらえないかというので、３月の月末の３日間、メ・サイから１６０ｋｍ北上したビルマのチェン・トーンというところへ。折よくダイ

エーのプロジェクト支援で来合せた静岡の磐田農高の高木先生も合流して。建設については、場所もスタッフも、　また資金もまだの段階で、その地区のラフ族のクリスチャンの協会の主席牧師が推進役。ビルマでの農業研修センターといえば、アカ族は既にタイより15ｋｍのタチレクの村に建設をしており、私も半年以上前より２回行き、仔豚も５頭与えて建設を前向きに准進しているので、これでビルマで払の農場のミニ版が２つ出来ようとしていることになる。皆さん！！批判的に考えずに素直に前向きにこの問題を考えてみて下さい。今ビルマには是非必要なことです。

おわり

発　行：平成14年11月
発行者：タイとの交流の会
（谷口プロジェクト）
事務局：今村真（三真土地建物）
熊本市幸田1-7-8
☎０９６（３７９）１００１

ひとりごと…

ー熊本県近代文化功労者顕彰を頂いてー

熊本県庁にて12時10分に開会した。国歌斉唱に続き、賞状、記念品贈呈、挨拶が2～3あった後、熊本市内の長嶺小学校の吹奏楽団による勇壮なる行進曲のメロディーがあり、受賞者への花束贈呈。そして最後に受賞者の挨拶ということになった。初めが三味線の駒・撥づくりの名人の石井方二氏で、私が次に立った。1人の持ち時間は3分と云ってあったが私は4分喋った。この挨拶についてはちょっとした裏話がある。10月に入って熊本の県教育委員会よりの書類を見ると、3人の内で石井氏のみにその挨拶のチャンスが計画されていた。これを見て私はすぐ熊本の教育委員会へ電話を入れ、“私にも喋るチャンスを与えてほしい”と申し入れた。突然の私の型破りの申し入れに相手方は戸迷った様子であったが、暫くしてOKということになった。同時に「時間は3分間ですよ」と釘を刺された。“6000kmを約5日間の日程を組んで授与式に臨み、その会場には払の支援者も何十人も祝いに駆けつけているに違いない。その晴の場で、挨拶の一言もなく引き下がるとは余りに芸がなく、様にもならない。”というのが私の言い分であった。私はタイに渡って20年、その間にボランティアとして活動したことが授賞の対象になったのであれば、20年間分を喋ることは出来ないが、それでも3分に縮めて喋れというのも酷である。とにかくこの様な賞を受ける人は、時間さえ与えたら何時間も喋るだけの内容を持った人達であろう。その様な受賞者にただ賞状を受けるだけで帰れとはむごい。前例がないからということかもしれないが、それなら来賓のきまり文句の挨拶をへずってでもその時間を受賞者に廻すべきであろう…と私は考えた。

最後になったが、今回の受賞ほ云う迄もなく決して私個人の才覚だけによるものではなく、この20年の長きに亘って、私を精神的にも資金的にも支えてくださった数多くの人々の、お力添えがあったればこそのものである。此処に改めて厚く厚くお礼を申し上げる次第である。

おわり